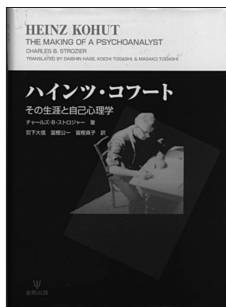


■ 書 評



ハインツ・コフート その生涯と自己心理学

Charles B. Strozier 著
羽下大信・富樫公一・
富樫真子 訳
金剛出版 2011年6月
574頁, 定価 8,925円

本書は2001年に出版され、米国精神分析学会グラディバ賞、カナダ精神分析学会ゲーテ賞を受賞した“HEINZ KOHUT: The Making of a Psychoanalyst”の全訳である。ハインツ・コフートの著作は「自己の分析(1994)」「自己の修復(1995)」「自己の治癒(1995)」(いずれもみすず書房)などが翻訳されており、我が国においても自己心理学の臨床と技法は広く知られている。ご承知のように、ハインツ・コフート(1913-1981)は、オーストリアに生まれウィーン大学を卒業し、ナチスの迫害から逃れてシカゴ精神分析研究所で精神分析医として成功し、“Mr. Psychoanalyst”とも呼ばれ、米国精神分析学会(APsA)の理事長として1960年代の米国精神分析を率いてきた人である。本書は、その伝記であり、伝記以上のものである。

精神分析はこの一世紀の伝記の在り方を大きく変化させた。フロイトが登場するまでの伝記は、社会的に重要な役割を果たした人についての事実紹介であり、模範的で歴史的価値があり教訓的なものを記述したものであったが、フロイト以降の伝記は、人の早期体験を詳しく検討し、その人が成し遂げたものだけでなく、変わった言動や神経症的な部分にも関心を向け、対象となる人物を追求し暴くことを目指すようになった。本書はこのような現代的な伝記の中にあっても一段と精神的である。単なるハインツ・コフートの伝記という範疇を超えた書籍であり、精神分析における内省と共感の位置取り、自己愛の諸形態とその変化などの研究業績、そして自己心理学の成立過程に関わるコフートの心的世界についての分析が織り込まれた精神分析的歴史書である。原著者のストロージャー自身が、シカゴ大学で歴史学博士号を取得した後にシカゴ精神分析研究所

でトレーニングを受けた精神分析家であるからこそ、本書のような記述と内容が可能となったのである。

コフートの出生から逝去にいたるまでの66年間に順番に五章に分けて並べられているが、いずれの部分にもコフートの人生上のエピソードや言動に関する分析的解釈がちりばめられている。コフートは64歳時に自分自身を物語るためのケースヒストリーを仕立て、その分析を“The two analyses of Mr. Z”として発表しているが(*Internatl. J Psychoanalysis* 60; 3-27, 1979)、「Z氏の分析」から引用されたコフート自身による分析は、本書に深い味わいを持たせている。

第一部「ウィーン(1913-1939)」では、父親・母親と過ごした幼少時代、医学部学生時代とナチスによる迫害とオーストリア脱出まで。第二部「フロイトの足跡を踏んで(1939-1965)」では、シカゴで厳密なフロイトの本流を継承する精神分析家として頭角を現わし、1965年にアメリカ精神分析学会理事長としての職責を全うするまで。第三部「呪縛から離れて(1965-1970)」では、自己愛に関する論考と考察を深めて「自己の分析」を出版し、コフート独自の世界を構築するまで。第四部「理論とムーブメント(1971-1977)」ではアンナ・フロイトやクルト・アイスラーからの決別と「自己の修復」の出版。第五部「英雄の誕生(1977-1981)」では、リンパ腫を発症し心臓手術を受けて体調を壊しながらも、「自己の治癒」を発表し、自己心理学学会を立ち上げてその第4回大会にて最後の講演を果たして永遠の眠りにつくまでがしたためられている。

フロイトの死後、米国の精神分析学会はAnna FreudとMelanie Kleinの対立を経ていくつかの流派が形作られていくが、本書を読むと、コフートが、Heinz Hartmann, Otto Kernberg, Eric Eriksonらとどのような関わりを持ち、どのように自己心理学を完成させていったのかがよく理解できる。19年をかけた膨大な資料収集と緻密な調査と友人・家族・患者への取材により得られた事実に基づいて書きあげられた本書は、精神分析的自己心理学を学ぶ者にとっては必読書と言える。

このような深みを持つ本書の翻訳は容易ではなかったろう。コフート自己心理学の理解に加えて、相当の時間と労力が必要であったろうと思われるが、原著の味わいを十分に残すべく80ページに及ぶ丁寧な訳注を加えて、ほぼ完全な翻訳を成し遂げている翻訳者の労をねぎらうと共に敬意を表したい。

(武田雅俊)